



ボリビア「ECO-TOMODACHI」活動の紹介

(VOL.4/2019年5月)

12 PRODUCCIÓN Y CONSUMO RESPONSABLES



「新しい仲間」

表彰 2018年、11月ECO-TOMODACHIの拠点であるサカバ市、清掃公社GERESがSDG

ゴール12「維持可能な消費と生産のパターンを確保する」の実践に貢献したことでGlobal Compact・国連より表彰を受けました。表彰式に、サンチェス市長とグティエレス社長(2017年帰国研修員)が参加しました。

SDG17項目から受賞団体が選ばれ、GERESは、廃棄物処理の継続な処理を目標としており、コンポストの生産と環境教育を通じてきれいな町づくりを目指しています。

写真:右から、秋山次長、渡辺職員(環境分野担当者)、サンチェス市長、グティエレス社長。



連携 2019年2月、JICAボリビアの日系企業「Ikigai/ER」、サカバ市、その他の自治体のECO-TOMODACHIメンバーがコラボレーションし、携帯アプリで高倉方式が学べる「こんぼっち」が生まれました。サカバ市長、ボリビア事務所所長、次長や所員がキャラクターとして登場します。「こんぼっち」を立体化させたゲーム開発者の

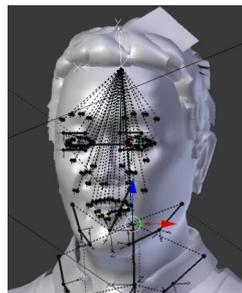
渡辺 勝さん(ER社代表者)は、ごみに関わる人の生活習慣を変えることができるのは、教育とどんな自然環境でも十分に活用できる柔軟性の高い技術であると主張。「ボリビアの環境教育と日本の技術の紹介に貢献できたことは、ERとしても貴重な経験です。アプリを作る際、現場視察をさせていただきました。ボリビア人が日本のごみの処理の技術を使い、まるで日本人のようにごみ処理に熱心だったことを思い出します。JICAの技術協力は、技術のみではなく日々成長する精神も教えてください。日系として非常に誇り高いです」と話してくれました。



2019年1月から、ウユニ塩湖や6000mの登山を含むボリビア観光ルートでのごみとトイレ環境の改善の必要性を感じている観光専門学校のAcademia Aventura(写真)と民間のキンバヤ・ツアーがECO-TOMODACHIの仲間になりました。4月7日、日本企業エクセルシアに協力いただき、Academia Aventuraメンバーが5000m地点の登山で携帯用トイレ「ほっと!トイレ」をテストしました。現地での水・トイレ・ごみ問題の解決に日本の技術が活躍することを期待します。



JICAボリビアの小原所長



こんぼっちの小原所長

2019年2月～3月にかけて、北九州市ひびきが丘小学校とボリビア国、コチャバンバ県サカバ市のM・テルセロス小学校の子どもたちが「自然と自分」をテーマに絵を書きました。4歳から12歳までの子どもたち74名が参加し、絵を交換しました。日本に送られた絵は、ひびきが丘小学校とJICA九州センターで展示され、ボリビアに送られた絵は、3月30日に「地球のための1時間」イベントで展示され、現在サカバ市清掃公社GERESで環境教育の資料として使われています。絵は、書いた本人の見たものではなく、感じ取ったことを素直に表現します。子どもたちの絵は、生き生きと自然と人の共存を語ってくれます。



2019年2月、7名の帰国研修員と1名のJ海外協力隊ボランティアが昨年6月に終了した「バジェグランデを対象としたごみリサイクルプロジェクト」(草の根技術協力案件)の現場を訪問しました。

当案件は、コンポストを生産するため「橋本方式」を用いています。ボリビア国内でこの方式を使っているのは、バジェグランデ市のみです。また、バジェグランデ市は、学校での環境教育やリサイクル活動を活発に実施しており、今回の訪問は帰国研修員にとって、自分の活動地域で抱えているごみ処理問題解決のヒントを見つけ出し、お互いに学ぶ貴重な機会となりました。また、7名の帰国研修員とJ海外協力隊は、案件終了後6カ月目のモニタリングにも協力し、JICAのプロジェクトで得られた成果の定着とスケールアップ及び持続性確保のための提言をしました。

お互いに学び、知識を分け合うことで成長していくことの重要性を実感しました。



(写真:「バジェグランデを対象としたごみリサイクルプロジェクト」の実施期間中に購入したごみ回収専用のトラック。週に2回、有機のごみを回収します。ごみ分別活動に1,000世帯が参加しています。)